

# 第36回愛知学院大学モーニングセミナー

## 「兄 城山三郎と私 —故城山三郎をしのいで—



愛知学院大学  
名誉教授 林 董一 先生



2009年3月10日

城山三郎 人と作品



昭和2年  
8月18日父政之丞、母寿々子の長男として名古屋市中央区に生まれる。本名杉浦英一。家はインテリア。父は発明好きで折り畳み式洋服置箱などの特許を取り、東京に支店を出したこともある。母は短歌や琴を趣味としていた。

昭和15年(13歳)  
名古屋商業に入學。陸上競技部、滑空部などに所属する。軍国主義教育の影響をまともに受け、杉本五郎中佐著『大義』などに心酔した。

昭和20年(18歳)  
父が徴用され軍隊へ。一家は豊明村の別荘に疎開していたが、名古屋市は空襲で焼失した。



昭和21年(19歳)  
アフラギ東海支部に加わり短歌を作る一方、アメリカ文学を専攻する。



昭和27年(25歳)  
一橋大学を卒業。父の病気のため帰郷し、愛知学芸大学(現・愛知教育大)商業科助手(のち専任講師)。38年退職となる。『景気論』等を担当。

昭和29年(27歳)  
小山容子と結婚。4人の友人と読書会「クレトス」を始める。この会は平成16年夏まで続いた。



昭和32年(30歳)  
文学に本腰を入れることを決意し、筆名を当時住んでいた地名より、城山三郎とする。



昭和34年(32歳)  
『総会屋錦城』で直木賞を受賞。子科棟に志願した青年が戦後社会になじめずいる姿を追った自伝的長編『大義の末』を刊行。



昭和38年(36歳)  
『小説日本銀行』刊行。パロン西を主人公に据えた『疏黄島に死す』を発表、文藝春秋読者賞を受賞。



昭和41年(39歳)  
『鼠』—鈴木商店焼打ち事性』刊行。不眠症克服のためもありゴルフを始め、終生の趣味となる。

昭和42年(40歳)  
足かけ9ヶ月に及ぶアメリカ一周バス旅行を敢行。この体験を『アメリカ細密バス旅行』としてまとめる。空手道場に通い、初段をとる。

昭和44年(42歳)  
『価格破壊』、『忘れ得ぬ賢』刊行。一年限りの約束で、小学校のPTA会長を引き受ける。また『久しぶりに忍耐の味を噛みしめ』、運転免許を取得。

昭和45年(43歳)  
『猛烈社員を排す』刊行。日本作家代表団としてソ連訪問、トルストイの静かな邸、土を感っただけの墓に強い印象を受ける。

昭和46年(44歳)  
『役員室午後三時』刊行。組織業界の名門に君臨するワンマン社長が暗闘の末、地位を追われる。『役員室午後三時』刊行。

昭和47年(45歳)  
『雄気堂々』刊行。A級戦犯で唯一の文官広田弘毅元首相の劇的な生涯『落日燃ゆ』刊行。同作で毎日出版文化賞、吉川英治賞を受賞。

昭和49年(47歳)  
通産省を舞台にした政治家の追慕のドラマ——『官僚たちの夏』刊行。

昭和50年(48歳)  
左遷された湯社マンの悲哀を捉えた『毎日が日曜日』刊行。

昭和51年(49歳)  
NHK大河ドラマの原作『黄金の日日』、受験戦争に材を取った『素直な戦士たち』刊行。

昭和53年(51歳)  
直木賞選考委員となる(58年まで)。

昭和55年(53歳)  
浜口雄幸と井上準之助、(金解禁)に生命を賭した二人の政治家を描いた『男子の本懐』を第1巻として、『城山三部全集』全14巻刊行開始。

昭和59年(57歳)  
『アメリカ生きがいの旅』、『本田宗一郎との100時間—人間紀行』刊行。

昭和61年(59歳)  
エズラ・ヴァーグレルとの対談集『日米互いに何を学ぶか』刊行。

昭和62年(60歳)  
キングスレイ・ウオード『ビジネスマンの父より息子への30通の手紙』を翻訳。

昭和63年(61歳)  
『粗にして野だが卑ではない—石田禮助の生涯』刊行。

昭和64年(62歳)  
『本田宗一郎は泣いている』を発表、文藝春秋読者賞を受賞。

昭和66年(64歳)  
『わしの眼は十年先が見える—大原孫三郎の生涯』刊行。

昭和67年(65歳)  
『もう、きみには頼まない—石坂泰三の世界』刊行、これら一連の作品で『伝記文学の新しい領域を拓いた』として菊池寛賞を受賞。

昭和68年(66歳)  
『運を天に任すなんて—素朴・中山素享』刊行。

昭和69年(67歳)  
『サフリーマン』として定年まで勤め上げた俳人・水田耕衣の肖像——『部長の大晩年』刊行。

昭和70年(68歳)  
『城山三部伝記文学選』全6巻刊行開始。

昭和71年(69歳)  
『運を天に任すなんて—素朴・中山素享』刊行。

昭和72年(70歳)  
『西の沢沢栄一』と謳われた松本重太郎の見事な出処進退とは——『気強る男』刊行。

昭和73年(71歳)  
『特攻隊第1号関大尉、玉音放送後に飛び立った中津留大尉、彼らの遺族、そして自身の軍隊生活をも描破した』指揮官たちの特攻——幸福は花びらのごとく』刊行、『これが私の最後の作品となっても悔いはない』と語る。



昭和74年(72歳)  
『経済小説の分野を確立、組織と人間を描いてきた業績』により朝日賞を受賞。

昭和75年(73歳)  
個人情報保護法案に反対し、『私をボケと罵った自民党議員へ』を発表、3度目の文藝春秋読者賞を受賞。

昭和77年(75歳)  
平岩外四との対談集『人生に二度読む』刊行。



昭和78年(76歳)  
『城山三郎昭和の戦争文学』全6巻刊行開始。

昭和79年(77歳)  
『本の旅人—3月号に連載エッセイ「仕事と人生」第15回「周恩来は人間道」を掲載。3月22日、間質性肺炎のため死去。享年79。

ゴルフ場でも紳士であり、キャディたちのアイドルだった。スコアは—

「総会屋錦城」で直木賞受賞。『経済小説』のバイオニアとなる

昭和30年代後半、大学講師時代

一橋大学在学中

復員後、体調をとり戻したときセツポタンの制服を着て



高い年の藤沢周平と

# 城山三郎さん お別れの会

静かに行く者は 健やかに行く  
健やかに行く者は 遠くまで行く

## 式次第

- 一、 開式
- 二、 黙禱
- 三、 弔辞  
辻井 喬  
佐高 信  
渡辺 淳一
- 四、 弔電披露
- 五、 喪主挨拶
- 六、 閉式
- 七、 献花

## 御礼

本日はご多用のなかご参会賜りご厚情の程有難く深謝いたします  
日を経るごとに「無所属」であった父がいかに多くの方々  
支えられてきたのかを実感しております  
「ありがたいねえ」という晩年の口ぐせが聞こえてくる思いです  
父らしく簡略の会のため何かと行き届かぬところがあるかと存じますが  
失礼の段お許し下さいませ  
取り敢えず略儀ながら書中をもって御礼のご挨拶を申し上げます

平成十九年五月二十一日

親族代表

杉浦有一（長男）

井上紀子（次女）

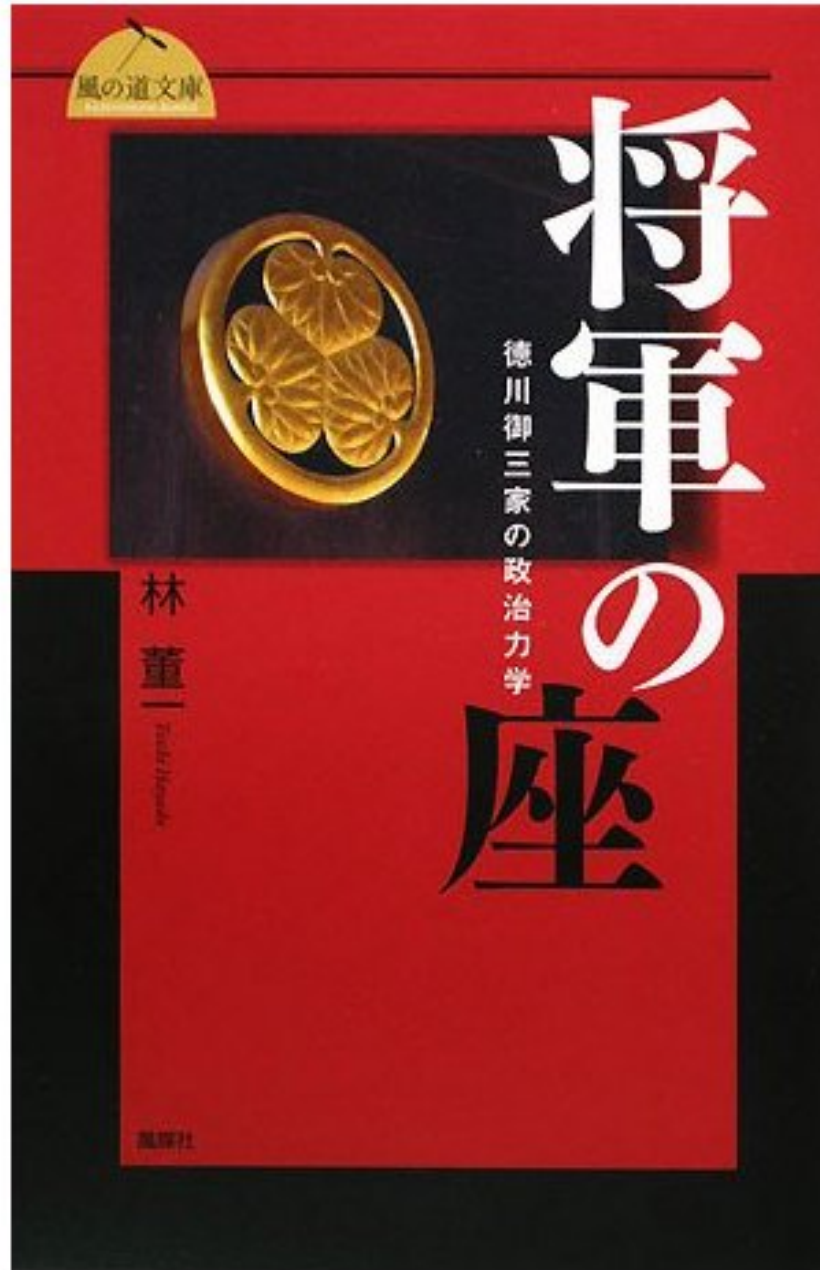
【城山三郎さん お別れの会】実行委員会  
幹事社

朝日新聞社、岩波書店、角川書店、  
講談社、光文社、集英社、  
新潮社、選択出版、ダイヤモンド社、  
日本経済新聞社、日本文藝家協会、日本放送協会、  
文藝春秋、毎日新聞社、読売新聞東京本社（五〇番館）



城山三郎氏の処女作として知られる『創意に生きる ~中京財界史~』は、1955年の中部経済新聞社への連載をもとに同社から刊行されて以来、江戸末期から戦前までの名古屋経済界の歴史を学ぶための好著として高く評価されてきました。





徳川御三家、骨肉の政権争奪劇の内幕は——。尾張・水戸・紀州の徳川御三家。その誕生から消滅までのドラマを描いた名著に、大幅加筆した、新版『将軍の座』！「徳川時代をその手でつかみ、その手で運んでくれた鮮度のよい本」  
(城山三郎、解説より)

## 新版へのあとがき

——兄杉浦英一を悼む

風の道文庫の、新版、『將軍の座―徳川御三家の政治力学』は、もとは昭和四十二年に、現在の新人物往来社から出した、『將軍の座―御三家の争い』と題する単行本にはかならない。同書は昭和六十三年、文春文庫として、文藝春秋の手で上梓、拙著ながらも想定外の好評をえて、四刷を重ねた。それについては、私事にわたって恐れおおいが、兄杉浦英一の尽力によるところがすこぶる大きい。

杉浦と私とは一九二七年、つまり昭和二年の八月十八日、木曜日、わが関東軍の中国山東出兵の暗雲が立ちこめ、国内では第十三回全国中等学校優勝野球大会が甲子園球場で、熱戦を繰りひろげているとき、名古屋の都心、現中区錦三丁目の商家で、呱呱の声をあげた。母の名は同じ壽々子と壽子。父も同年齢で、一時期、同じ町内に住んでいたとか。

まったく無関係の兩人は、のちに二度におよぶ運命の出合いを経験することになる。最初は

昭和十五年四月、旧制中学の市立名古屋商業に入学したとき。同じクラスに配属され、彼は級長、私は副級長に選ばれて、教室の最前列に机を並べた。ほどなく、太平洋戦争の暗い谷間。友は大義に目覚め、海軍特別幹部練習生を志願して、軍務に。私は上級学校に進学して、学業を継続する。そして、終戦。ふたりを結ぶ絆は、完全に切断されたかにみえた。ところが、である。ふしぎな縁で、杉浦の妹君枝と世間並みの見合いをへて、二十九年の晩秋に、婚約。友人変じて兄弟となって、再会をとげることになる。

当時、われわれは大学で、研究者への道を歩んでいた。杉浦は妹の縁談を耳にすると、「あいつはいい奴だ」と、真っ先に賛成してくれたという。彼の母も、「同じ職業だから、互いに力になれるかも」と、乗り気をかくさない。さらに、翌年五月三日の結婚に際しても、「嫁ぎゆく娘の晴姿調度品 亡父母今ぞ 心満らむ」との一首に託し、祝福してくれた。

しかし、兄はまもなく城山三郎のペンネームで、文壇にあざやかに転身。文筆の仕事に専念するため、教職を辞すると同時に、妻子をともなって、名古屋から神奈川県茅ヶ崎に移す。以来、半世紀。大好きな湘南の海の光る仕事場で、活発な創作活動を展開し、「黄金の日日」の一時期を築き上げた。こえて、ことしの春の彼岸、平成十九年三月二十二日、間質性肺炎を患い、七年前に他界した妻容子のあとを追うかのように、卒然、長逝する。置き去りにされたかたちの私は茫然自失。蓮如上人、「白骨の御文」の「朝アサニハ紅顔アリテ、夕ユフニハ白骨トナ

レル」の通り。諸行無常と、近親の抜けた身辺の寂寥におののき、立ちつくし、そして悲嘆の深淵に沈んだ。

世人は杉浦を指して、経済小説の開拓者、戦争文学の旗手と位置づけ、護憲、個人情報保護を高唱する論客と評する。新聞雑誌、テレビの画面にも、「正義」、「気骨」、「勇氣」とか、「格闘」、「サムライ」とか、勇壮、剛毅をイメージする文字が躍る。まったく的外れ、とそれを否定するつもりは更更、ない。だが、しかし、彼とともにすごした六十余年。私には無口で物静か、気くばりのよくきく、控え目でおだやかなイメージのほうが、より強い。「兄様」と尊敬してやまない家内も、同じ印象を抱く。妻の容子と、生後まもなく急死した長女弓子、長男有一、二女紀子の三人の子をこよなく愛し、やさしく抱擁する。容子が常づね、「うちの主人の小説には、女性が登場しないの」と、ふつくらとした美しい表情で話す麗容が、あざやかに思い起こされ、万感胸に迫る。

思い出といえ、忘却の霧の中から、回想の宝石を拾い集めると、そこに力ある友情、固い信頼、清らかな敬愛の心象が、燦燦と光を放っていることに気付く。

杉浦は、よき友であった。心友であった。中学生の頃の一齣。航空機のパイロットを憧憬するだけあって、身体強健、運動神経は抜群。反対に、私は「五十歳まで生きればいい」が口癖の虚弱体質、そのうえ動作がにぶい。とりわけ緊張感が極点に達すると、右と左の判断がつか

かなくなるので、具合がわるい。軍事教練の授業で、行進の訓練。級長は列外で号令を發し、副級長は隊列の先頭を堂堂と進む。「前へ進め」と「全体止まれ」は、無難にこなす。「回れ右、前へ」も、心配ない。鬼門は「組ぐみ左へ」、「右へ」である。彼の澄んだよく通る声がかかった瞬間、心臓は高鳴り、頭は混乱、右はどっちだ、左は、と。度胸をすえて、あて推量で曲がって、数歩、振り向けば、級友がうしろにいないではないか。「ばかもん」。烈火のように怒った、軍人あがりの教師。杉浦の作品の題名通り、「頭にガツンと一撃」、火花が散った。泣き面で教室に戻った私に、友はしきりに同情する。「林、箸をもつほうが右だ」。それはわかるが、実際となると。「では」と諦めずに、「右の手首に、白いひもを巻き付けたら」。「いや途中で解けてしまうかも」。しょうがない、と舌打ちして、以後、魔の発令を避けるようになった。おかげで、わがクラスだけは、同じところを往復するばかり。彼の細やかな配慮に助けられて、鉄拳の制裁は、以後まぬかれた。

友は、よきライバルでもあった。中学時代の某月某日。背の高い地理の教師が、教壇から私たちに視線を投げかけつつたずねた。「一体、杉浦と林とでは、どちらがよくできるのか」。「杉浦に決まっています」と、私は即座にきっぱり答えた。それは謙遜ではなかった。地理と歴史だけは、上位の自信があった。国語、漢文と英語は、まず互角。決定的に格差のついたのは、珠算、体操、軍事教練、それに武道。おそらく卒業するまで、総合の成績で、彼を抜くことは



できなかったであろう。いや、なかった、と断言してもいい。

ライバル意識は、兄弟に変身したのちも続く。兄が直木賞、毎日出版文化賞等、数多くの名誉ある賞にかがやいても、「おめでとう」との祝意を表したことは一度も、ない。兄は兄で、私が博士の学位を取得しようが、中日文化賞や明治村賞を手中にしようが、音沙汰がない。互いに、現状に満足せず、より大きな目標に向かって飛躍しよう、との決意と激励の感情がそうさせた。とすくなくとも私は思う。信じている。

ありていに告白すると、私たちは会って久闊を叙しても、仕事の話をしたことが、ない。私  
が兄の近作を話題にしても、ただ微笑するだけで、おおくを語らない。語りたがらない。弱音を吐き、愚痴をこぼすこともまったく、ない。

筆はいささかそれるが、ここである出来事にふれる衝動に駆られる。昨年二月、兄嫁の七回忌の法要のあと、親族一同が会食した席での光景。姉貞子と弟秀雄のにぎやかな、屈託のない言葉の応酬に、みなは哄笑の渦に巻きこまれた。そのときである、兄が私にポツリとつぶやいたのは――。「昔、先生をやめて、名古屋を離れる際は、本当に不安だったな。これから妻子を養っていけるか、どうかと」。また、あとを続けた。「だが、家内が入院、医師からがんの宣告を受けた瞬間のほうが、もっとショックだった」。私はなくさめる術を失った。思えば、これが今生の別れとなった。それは天空を金色に染める残照と、万物を育む余熱を秘めた落日の、

燃え尽きる予兆ではなかったか。

彼は、よき兄でもあった。心底畏敬の念を禁じえない。自著を上梓のたびごとに、兄に献呈した。兄も文庫本は別として、全作品を発刊と同時に贈ってくれた。それ等は書棚の一角に配列され、質量ともに他を圧する業績に、私は日夜接している。

ところで。兄が離名してまもない、ある日。みなれたきれいな筆跡で、一通の書信が届く。「昵懇の読書新聞編集者の稲垣喜代志氏が、名古屋で出版業を手がけられるので、よろしく」。これが良書を出版し、東京に負けない地域文化の振興を、とがんばっておられる風媒社の稲垣社長と、親交を結ぶ機縁となり、今日まですこしもかわるところがない。

六十三年六月、われわれの姪英美子の結婚式が、名古屋のホテルで挙行された。一族の者は控え室に集合し、雑談の花を咲かせていた。と、そのとき、兄は突然私に、例の静かな調子で、「【將軍の座】を文春文庫の一冊に加えよう、と思う。版元との折衝はこちらでやるので、任せてくれないか」。一二つ返事で承諾したことは、いうまでもない。兄は匆忙の間を縫うように、厄介な事務的交渉を一手に引き受けたばかりか、「解説に代えて」との一文を草して、洛陽の紙価を高めてくれた。

兄は父母妻子の待つ理想の彼岸、極楽に向けて、足早に旅立った。一方、煩惱の此岸をさまよひ、老残の孤影を斜陽にさらす私は、潜然と悲涙にかきくれた。そして、きょう、ふたりは



八十歳の誕生日を迎える。彼岸と此岸、浄土と穢土、居場所こそちがえ、八十の賀の祝杯をあげようではないか。こう考えいたると、胸中の漆黒の雲が心なしかうすれ、濡れた瞳にかすかながら、七彩の虹の麗姿が仄みえてきた。

私の恥知らずなモノローグとして、お聞き流しただきたい。波瀾万丈の八十年、一代の大半を、文芸の分野で活躍し、「雄気堂々」、民衆の琴線にふれる佳作を相ついで発表、大方の共感と支持を呼んだ、兄英一。積英筆との法名は、筆一本で文学界に新たな地平を切り開き、光彩陸離たる業績を残して、作家の本懐を遂げた男に、よく似合う。じつにふさわしい。

私は風媒社刊の新版、『將軍の座』の刊行の暁には、真っ先に虹の懸け橋を渡って、兄のもとにそれを届けたい、との強い願望をおさえることができない。

平成十九年八月十八日

暮色深まる残暑の

名古屋城山の書屋にて

林 董一

巨大な名古屋城の正面(南)に展開する「碁盤割」と呼ばれる整然とした城下町。朝に夕に城の天守閣を仰ぐその一角に、本書の著者林董一氏は生まれ育った。生家は幕藩時代からの大きな金物卸商である。

長男である氏は、名古屋の旧家の長男の進む典型的なコースである名古屋商業学校へと進学。明治初期、いまの一橋大学などとはほぼ同時期に開校された伝統のある学校だが、校風はモダンで、「世界は我が市場なり」を校訓とし、当時の校長はアメリカのコロンビア大学の出身者であった。

わたしも同じ名古屋商業へ通い、同じクラスになり、級長・副級長として文字通り机を並べたこともある。

氏は勉強家であり、自分から話すタイプではないが、明るくよく笑った。ただし、いざとなれば物言いははっきりした生徒であった。

そして、その後は他の生徒たちとは全く別の人生のコースを歩み出した。

戦争。林氏は文科系の身にはとくに難しい試験をパスして、理科系の岐阜薬専(いまの岐阜大学薬学部)へと進み、戦後はさらに転じて名古屋大学法学部へ。そして、そのまま学生生活へ。

生粋の名古屋商人の血脈に加えて、経済学と薬学と法学。これらが化合し、発酵して、氏の研究をつくりあげて行く。

もともと地味というか、地道な研究一筋であった。

資料の山に挑むだけでなく、古文書を求めて旧家を歩き回る。古い蔵の匂いが体中に浸み込んでいる、と思ったこともある。

しきりに聞き取りも重ね、研究室とフィールド・ワークに明け暮れる日々が続いていた。

「月月火水木金金」という軍歌があったが、林氏の研究生活ぶりが、まさにそれであった。おそらく趣味らしい趣味はない。というか、徳川時代に生きることが趣味のようで、「現代と徳川時代の二つの時代を生きる、これ以上何の趣味が必要か」という風にも見えた。

氏のメインワークである『尾張藩の給知制』(一条社)、『尾張藩公法史の研究』(日本学術振興会)などは、アカデミックで緻密な労作であり、学界での評価や信頼も高いようだが、氏と

座談していると、その話がまことにいきいきとしていて、おもしろい。

氏の体中に徳川三百年がまっついていて、ひとつキイを叩くと、次々と溢れ出てくる感じなのである。話を聞いている中、こちらまで誘われて徳川時代を歩いている気がしてくる。

その持ち味を活かしてできたのが、この『將軍の座』である。

読物としてもたいそう興味深いが、といって、ひとつのフィクションも誇張もない。すべて林氏の緻密な考証によって引き出された話ばかりであり、このころ流行の「孫引き」や「孫引きの孫引き」の本ではない。

徳川時代をその手をつかみ、その手で運んでくれた鮮度のよい本である。その内容については、いまさら説明を要しないであらう。

著者の横顔を伝えて、解説に代えたい。

(作家)

[著者紹介]

林 董一 (はやし・とういち)

1927年、愛知県名古屋市に生まれる。1953年、名古屋大学法学部法律学科卒業。1959年、名古屋大学大学院修了。日本法制史専攻。法学博士。1966年、愛知学院大学教授。現在、同大学名誉教授。1979年、第32回中日文化賞受賞。1995年、第21回明治村賞、東海テレビ文化賞受賞。

著書

- 【尾張藩の給知制】(一條社)
  - 【尾張藩公法史の研究】(日本学術振興会)
  - 【名古屋商人史】(中部経済新聞社)
  - 【新編尾張藩家臣団の研究】(図書刊行会)
  - 【尾張藩漫筆】(名古屋大学出版会)
  - 【近世名古屋商人史の研究】(名古屋大学出版会)
- など多数。

装幀 = 夫馬デザイン事務所



風の道文庫 (東海風の道文庫 8 [特別版])

将軍の座 — 徳川御三家の政治力学

2008年12月20日 第1刷発行 (定価はカバーに表示してあります)

著者 林 董一  
発行者 稲垣 喜代志

発行所 名古屋市中区上前津 2-9-14 久野ビル 風媒社  
振替 00880-5-5616 電話 052-331-0008  
<http://www.fubaisha.com/>

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。  
ISBN978-4-8331-0625-2

\*印刷・製本/モリモト印刷

# おでん正月



林 董 一

わが家には二十年近く、「おでんの会」と呼ぶ正月行事があった。一月四日の昼とき、ゼミ所属の大学院学生、通称院生に、いまは大学教員や公務員、税理士として活躍する、九割方女性の修了者をまじえて、師弟そろっておでんの鍋をかこむ。それは一月末の提出期限におくれないよう、年始の休みを活用した、修士論文の指導に関係をもつ。新年そうそう、鬼面仏心に徹する私に一時間も質問攻を再開したい、ともらすくらしい料理好き。

本誌六〇六号、「もてなしの美学」で紹介した、もてなしの精神旺盛な母親の血を引く。たまたま、実兄の城山三郎が文壇に登場し、売り出し中の時期に、友人から気遣いの眼で、「お兄さんはお幸せ。人気作家になられて。」ところが、本人は首を横に振り、「いえいえ」と力をこめる。「羨ましいとおもいません。うちには教える子という、財産がありますから。彼女の言葉はいつわりではなかった。負け惜しみでもなかった。学生を財宝のように大切にしてみてもなかった。こまめに茶菓を運ぶ。ひとりに好物をたずね、メモもとった。男子学生が大半を占める時代。なかには「女性」とのふざけた回答もみられたが、一番はカレライス。家事の合間に調理にはかえる。星霜をへて、カレーはおでんに姿をかえる。余談を差しはさむ。先日の経済新聞の記事によれば、最近鍋料理をふやす家庭が目立つと

めにあう、親子程の年格好の彼等に同情した妻が、せめてささやかな慰勞会でも、と発案もつとも、学生への接待は、近年だけのことではない。新米で、新婚の教師の私がこわごわ教壇に立った、半世紀前にさかのぼる。当時、自宅は大学学舎から目と鼻の間。学生がしょっちゅう押しかけてきた。成人式を終えたばかりの妻は、同年配の気安さも手つだい歓迎した。夫に先立たれた所には、送客

か。理由は「安上がり」。食べたいメニューの一位は、「すき焼き」。次は「おでん」。以下、「寄せ鍋」「しゃぶしゃぶ」「キムチ鍋」。おでんを選んだ気持がわかるよう。巷に木枯らしが吹きすさぶなか、材料の仕入れに店店をのぞく。すじ肉、コンニャク、竹輪、ハンペン、大根、里芋、コンブ。並行して、お節料理の仕度も。いささか古い商家なので、定番の品目が祖母から母へ、母から妻へ、と口伝。十種類程で、すべて手づくり。おかげで、せまい台所は熱気にあふれ、戦場の様相。鍋という鍋は動員される。冬至すぎ、すじ肉を煮はじめ、カツオ、コンブとともに

ダシ汁に。頃合いを見計らい、具を入れてコトコト煮こむ。これにゆで玉子を足して完成。いよいよ、本番当日。十五人前後の客人が顔をそろえる。十畳の洋間を開放、座布団を並べて、中央のテーブルに重い鍋を置く。二組にわかれ、各自の好みに応じて小皿に取り、ねりミンとカラシをつけて食べる。味が十分滲透し、とろけるような舌ざわり。優雅な食感、豊潤な滋味。お代わりの手が四方から伸びる。歳末ジャンボ宝くじやら、競馬の有馬



記念やら、談論風発。屈託のない世間話の花が咲く。先刻の厳しい心象が消えうせ、私は好好爺然として、もっぱら聞き役に回る。ところが、数年来、新玉の春というのに、若さのはじける会話も、陽気な笑声も、まったくない。家中、悠悠閑閑、寂寞とした空気がただよう。そう、現職を退いた私には、論文を叱正する相手を欠き、おでんの会が開けないのである。おでん正月は渺茫たる往事の彼方に埋没してしまった。でも、でもである。これでは、と自身に問いかける。生老病死の憂患は、火宅の人の宿命。いまや老いの影の濃い私たちに、年の瀬の匆忙や労働に耐えうる、気力と体力が残されているか、どうか。一片の浮き雲もなく、清澄静謐に晴れ渡る初春の天空と、葉を散らした瘦身に寒風を受け、すすり泣くように小刻みに揺動する冬木と。そこに虚無と諦念の映像を鮮明にみた私は二度、三度と深くうなずくのであった。(愛知学院大学名誉教授)